す。貴市(ちち)を矢張此市(こさら)にの？」

「田原(たはら)さんの経営なすってる新聞社の市(し)

御りてゐます。」

「学院時代の友人が、お二人も揃(そろ)ってお出

迎へなさるのは実に奇遇ですな。」

堅雨(けんし)は驚(やが)て徐(すき)と

「堅雨(けんし)、能く逢(たうしや)ぢゃ……」と云つて泣きり、お

へました。

「堅雨(けんし)、能く逢(たうしや)ぢゃ……」と云つて泣きり、お

幸は暫く言葉を途切(とぎ)らしてゐたが、驚(やが)て徐(すき)と

市を見つゝ「ホヽヽヽヽお前が園

を出た時は、まだ物を言へない程だつたが、
もう今年は十六だよ。」
母親の膝の辺りの、厚地の綿入れの着物を、もう
十六かしら……」と自分で感慨無量の體で繰り返
してゐた。

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

一行アキ

三字

誘惑

一行アキ

□石塚（いしづか）さん、あなたは仏蘭西（フレンチ）談がお上手で、すってね。」と時ふは甘へるやうに訊（き）いた。

□い、え、誰がソンナ事を云ひました。フレンチなんか全（まる）で知りやしません（けんえん）よ。」

□御謙遜不。」

□本当ですよ。」

□ちや（ヤアマン）、獨逸語はお得意（そしい）でせうの、」

□獨逸（ドイツ）なら少しは話（はな）せます。」

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

「然う、嬉しいわ。私、実は模造(ダミー)張か沼ひ
ちゃんの、あなた教へて下すって？」
「人様(ひとさま)に教へる程の力はありません(ダミー)よ。」
「宜(い)いのよ、教へて頂戴。此間中西(なかにし)さん
に勧められて藤澤古雪(ふじさわこせつ)さんのハイマートを読
んでみたの、大変面白かつたので、どうかし
てスウデルマンやストリンドベルヒを直接(じか)に
読んで見たいの。ね、
お父(とう)さまはりに行きますわ。」
二人(ふたり)は太地(おおじ)を出て、淋(さみ)しい町を東へ三町
名塚(なづか)さん、明日(あす)から私

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

ばかり走って居た。もう十時を過ぎてゐたので村も町もばかりの所は寂然(ひっそり)として、其所(そこ)此所(ここ)の軒燈(けんとう)が寒暗(うすぐら)く点(とも)ってゐるばかりで、両側の家は大抵戸を下(おろ)してゐた。

四辺(あたり)、数へて頃哉(ころかな)ナ。と婆子は甘(あま)へる様に言ってぴたりと覚也(さめやら)ぬ容(ようす)に寄添った。覚也は黙って歩いて居たが、昨夕(ゆうべ)熊野権現の境内(けいだい)で、美(うつく)しい夜櫻の下を時子と肩をすくに隣(なら)って歩いた事やら、今日二軒茶屋で教(おそ)ゆる海の景色を一ツ一ツ指(ゆびさ)して立趣(なにごと)って聞かせた事や

らを悲しみました。そして覚悟の心は何となく踏ろやうに感じた。

ゆお伺ひしてはゐ不可い？　良妻賢母主義ネ、妻帝は。ね、石塚さん。私斯う思ふのよ。

狭い人生ですもの、詰らない事に怖々して過してゐますわ。私、故郷へ帰ってみますわ。田舎へ行ってみますわ。私、故郷へ帰ってみますわ。田舎へ行ってみますわ。

を読んで倩々感心しちまつたわ。田舎は

れた人の眼からは羨ましく見えるかも知れませんが、どうせ一度は棄つて来る思想ですもの。私なんか石塚さん、来春ん自由なのよ、小

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

106

鳥のやうにネ。毎日行きたい所へ行き歌の事を教つてますの。石塚さん、古い文句ですが若い時は二度無いのネ。出来るつたけ自由に花々しく……」と言ひかけて時子は立止つてスカーフを一寸直し、「私、寒くなつたワ、巻帯は寒かアなくつて。」

追駆るやうな時子の覚せの右側へ寄添つて来た。青春の血の脈つた若い二つの体躯が、衣一重を隔て、触れつ離れつ人目の小い薄暗い町を歩いて居る時、覚せの神経は微かに鋭

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

くなつて、時々が話す度に近る息の香が、自分をまた行つた車の無い未知の世界へ引張つて行かれ度いと云ふ強い〳〵力を持つてゐるかのやうな感じがした。

「石吹さん、どうなすつたのです。」

「必ずもしやしませんか。」

「なつて、黙つてらつしやるぢやないの。」

「僕は今、獨逸張の事を弁へてゐるのです。」

よ。」と覚也は出鱈目を言つた。

「数へて下さるワネ、私、明日からお伺ひ

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

します。エゲりこの一を持って行きます
ワ。」
時子は石塚を見上げる甚の神を捨つるや
うにして言った。
「ゴは、お猶予をする心算で娘めますわね。」
「嬉しいわ。お、勉強します よ、一生懸命
に有る。」
二人は舷側を密着って本町通りへ出ると、
「あの白子に黒い杜が見えませう。」と時子は
苔黒色のコンモりした森を指して、「あの杜

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

の下が私の宅なの、廷中が淋しいのよ、送つて下さるね、」

「お送りしませう、そんなん迂路でもありますまい。」

「無う、だけど濘みませんわ。」

姉が先つ立つて行く暗い途を三尺ばかり離れて覚束は黙つて蹤いて行つた。暫くは二人とも口を利かなかつた。

「あすこなの、私の家は。」と朧な杜の下の小い洋風の二階家の前まで来ると、「一寸お

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

二行アキ

休みなさつらつしやつな。
ロイヤ、昔(キ)う失禮致します。
ロちやア、ぼ晩ネ……今晩は昔う晩(おそ)いから
無理には願つませんワネ。
ロ明晩は常仙寺の詮話會で
事になつて居るので……
ロちやア明後晩……さつと
なくつてよ！
忘れると詰(き)が

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

明る朝出勤の途中、覚也は一町程あざ
迂廻をして降るの宅の前を通って見た。街道
筋から十間ばかり奥へ引込んだ閑寂な家柵の中に
立ってる満洲とした二階家であった。庭前の
大きな山櫻が散殘りの花をつけた枝を屋根の
上まで伸ばして、四五羽の雀がちゅっちゅっと鳴
いてゐた。扨込んだ格子戸の入口にはかまつ
もと山と書いた瀬戸の表札が掛ってゐた。
覚也は一寸立止って見たが、さっさと夢中
に早足で歩き出した。社へ行っても何なか落

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

々して仕事が手につかなかつた。学校の論説を書かけたが、一二枚書いては引裂き二三行書いては引裂り、一時間はかりもかゝつて漸と四五枚書いた。で、手當り次第に筆を取つて面を指して讀して、面白さうな記事を十ばかり切抜いて、夫れで一日の面を塡めて置いた。

そして十二時前に寝床を出て、町を何所へ行くともなく駈け廻つてやつと

いふ目的も無く唯ぐるぐると歩いて下宿へ帰つたのは最う二時過であつた。

覚也は食事を濟して机に凭掛つて煙草を喫して

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

みたが三時過に又五下宿をおでかけ
を歩いた。頭(かぶ)て小い塔を越えて教会の前まで
来ると、音楽(おとなし)牧師と田舎ドクトルとが佇立(たたず)つ
て来て、

「やア石塚君(いしづかくん)、昨晩は失敬(しつけい)しました。」と音無(おとなし)は
真(まこと)に声で言つた。

「やゝ、これは覚(かく)也も軽く会釈(えしゃく)して、昨晩は
失礼しました。」と更(あら)めて田舎に丁寧に叩頭(おじぎ)を
した。

「まう結婚は締切(しめき)つたのですか。」

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

「ええ、最う帰って清水君に後を頼んで置きました。」

覚也は餘程ドギマギしたが直ぐ左あらぬ體を装つてゐた。

「では、王子ヶ濱へ行かう、晩飯接へ。」と音無は、

宅の言葉の終らないうちに、

「晩飯接で今晩說教するんだが、面白い集りだぜ、元食が来るんだからネ。」と言って覚也の後の魂の隅々までも覗き込むやうに、かろがろと笑つた。

「其方の話を見詰めながら、「名塚君、少し

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

顔色が悪いやうだぞ。

「別に何所も悪くなしか、……今夜は失礼（おいとま）します。用事が濟んだら後から

があるので失禮します。

らでも伺ひますせう。」

「是迄来て呉れ給へ、実は濟美歌（すみか）を助けて

貰ひたいのだ。」

「濟美歌の、僕には歌集だよ。」

「なアに、学院時代に聖歌隊（せいかたい）で一緒に歌つた仲（なか）だよ。」

「もべースで鳴らした（もの）やなしか。」

「なつて近頃は疎（うと）く歌集だよ。」

二人(ふたり)に別れた覚也(かくや)は物に追はれやうな宿
へ急いで帰つた。そして直ぐ風呂へ浴(はい)つて褌(ふんどし)
神(ばん)も祝(いわ)ひの赤飯へ、奥子(なおこ)の紋付の羽
織を引かけて大鉢の前に坐つて見た。
すると飯が済まなかつたつけ心と小声で独(ひと)り
語(ご)つつ、無意識に大鉢の縁(ふち)を大箸で軽く叩い
た。時計を見たがまだ四時五分だ。此家(ここ)の夕
飯は大抵五時半だからマダ一時間(あと)もある
。正体(ほんやり)して居(い)ると寂(さび)しいと思つ
たので、又た家を出て海(うみ)へ時子(ときこ)の宅の方へ

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

若い男が綺麗に磨き立てた

あゝ
歩いて行つた。しかし時子の家の壁が指の葉
底と見え初めた時、何故か急に悔しくやう
な恐ろしいやうな心持になつたので、竟そ思
ひ切つて引返さうかとも思つたが、丁度角の
石屋で大きな石碑(へコツ〳〵と叩く文字)を刻つて居るのが目に留つ
たので、二三歩近寄つて見るとはなしに夫れ
を見詰めて居ると、不意に後から「石塚さん
！」と呼ぶ者があつた。覚せは吃驚して振向
いた。石屋も鑿の手を止めて此方を見た。
「まア石塚さん！　どちらへ。」

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

時ふと妻をみやられた覚也は餘程(まつぽど)マゴ〳〵した。時ふは風呂からの帰りと見え、大きなタオルと小い金盥とを抱(かゝ)へてゐた。無論(むろん)気(け)の無い湯上りの顔が赤く光つてゐた。眼鏡が美しく光つてゐた。御手(おめし)の御召の羽織を無造作(むざうさ)に引かけて、羽織の紐をだらりとうしろに垂れたのが如何にも仇(あだ)っぽく見えた。

昨晩は失礼致しました。私、こんなうちに宿(とま)つてゐましたのです。

119

二行アキ

さア、何卒お先へ、山とお積みの調子は昨日
に反対へ艶な容子と不似合に凛りとしてゐた。

「叔母さん、お客様よ。」時子は玄関の所から勝手の方へ怒鳴って置いて、「さア、何卒こちらへ。」と覚せを二階へ案内した。覚也は少し怖ろしいやうな気持で二階へ上つて見ると、美しい花模様の緞を敷き詰めた真中に四角な卓を据えて、ミツションの角椅子を

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

四辺(くるり)周囲に並べてありました。

「さ、どうぞお掛け下さい。」と言いつつ時(とき)は元日を告げた窓際(まどぎわ)のソーファに腰を掛(か)けました。覚也(かくや)は黙って椅子の後に立ったまま、差出された名刺を見入って、

「誰ですの、これは。」

「名も何にも無い人でせう。」

「お友達のお土産(みやげ)ですが、多分せがンスか誰かの孫弟子(まごでし)・くらゐかも知れません。」

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

「全体何を掩いたんでせう？」

「山むさゝ〳〵ですよ、土を掘つた趾なんです

とサ。」

「僕は又、西瓜の贋つたのかと思ひました

よ。」

「随分酷許ね、思ひ切つた事を仰しやる。」

「酷許でも何でもありませんが、俺には大つ

とも解らないんですもの。」

言ひつゝ晃也は椅子に腰を掛けながら傍の

書物を見ると、「良人の自白」「霊か体か」

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60　　ガラス使用

「犬の柱」「巴里（パリ）」「モリエル全集」「父と子」「甚前夜」などが並んで居た。甚下には英書が五十冊、トルストイやハンゲーネの書久字（せもじ）が光ってゐた。

時々は吐鈴（よびりん）のボタンを押へたら、「石ころがさ、まあなんは小説をお嫌ひ？」

「あんまり強みません。レエークスピヤやアーヴィングを教科書として読んだ位なもので、日本のものは余りやった事がつたものを時々拾ひ読みして居ますが……」

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

「文学を解さない」お方は本当にお気の毒な。私なんか斯うして独身でやって行けるのは全くお陰よ。そこへ下くらや覚也は近頃の仕様が変かった。そこへ下から最前の女が上って来た。

「お母さん、クキスが焼けてゐませう、それから最前の女が上って珈琲の濃いのを不。」

「畏りました。」と女は直ぐ引返してしまった。

「お、此間からマルクス・ボヴリーを読んでま

すのよ」

「マダム・ボワリーですのは誰の作です？」

「フローベルよ。私、あのエマという奥さんに未亡人同情しましたの」

「どんな筋ですか、梗概だけでも伺いたいもんです。」

「ではお話ししませう……一寸失礼します（はしご段を下りる）

よ」と時計は燐(おも)り出しやうに（ときどき）

て一言二言何か吩咐けたらしかつたが、直ぐ

上つて来て冠(くわん)也の右側に坐を占めてマがらや

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

ルルと結婚して失望して
十波奴のしオンと懇に暇
て来た訴を読り聴って、
の私、本当にさう思
洗濯かとかものは皆
れた生か張切って夫が
私んな市面に為様さ
と言った時、お母さんが
ゆさ、何にもありま
て、おもお邪体致しま

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

時子は再び坐を変へて覚也と対面せになつた。覚也は黙つて若を執つたが、暫くして進そうした気分が何時となく和らいで、時子の話を感心してつくりと聴くやうになつた。

時子は急な食事には起き出でられないので、覚也と対坐して朝からの事を話した。

「あの、思ひ切つて工マを訪問したか、去就りが明らさまは言ひ出せなかつたので、工マの知らないと思つて居ると、工マが一生の歎みを打ち明けて、レオンが巴里へ出る時、もうこれが一生の別れなんですがいレオンは巴里へ出る時、

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

二行アキ

産んだ妻人坊の ヘルタに接吻(キス)して其儘逃つて
別れた所が私ア不安ん嬢しらすよ。時(とき)は午
手の屋根の様(もやう)を見詰め乍ら言つた。

巨人(きよじん)の兜(かぶと)のやうに見える蓬莱山(はうらいさん)を左手(ゆんで)に見
ながら二人は後方(あとふく)の墓の近くを旧道(たんぼみち)の方
へ出た。

私ア、男の子(だん)には誰にでも出来よた仕打
るの、行きなり甘へて見るのよ。あなたんだ

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

つて此間から陰分(おかぶん)甘へましたわネ。さうして
ニミ時でも話して見ると大抵な事の方のお心
は(が)(あか)解るやうな氣(き)まかしますのよ。心(さは)
覚也は自分でも解るのが恐ろしい傷痕(きずあと)をチ
クリと剌さゝれやうな氣持がした。
(そこ)(どうてい)
同じ事に驚いたものネ。一旦童貞を捨
てた男は高々(たかだか)駄目よ。男でも
で女の心を把握(すまつ)するから女に馬鹿にされるの
よ。自分が(かつ)飽れてると他(ほか)も飽(かつ)えてるやうに思
つて(こゝ)未。私、未(いま)だ女に産(う)れた事を倩々(つくづく)感謝

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

しますわ。」

「さうですか……」と覚也は一向気乗りのしない返事をした。

「本当に然うよ。」と時おは憂みかけて、「女は處女を捨てゝも元の處女になる事が出来ますわ。早く話がまとまれゝしても結婚もしました。然れども夫に死別れた今では再び元の處女の心持よ。十五六の時と違いませんわ。だから私、男の方にちっとも遠慮するのよ。女てなの

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

は断ったものネ。ですけど男ってものは童
(こ)
貞を捨てたらもう決して再び元の子供に帰ら
(どう)
かません。甚の證據(しょうこ)には十八九から一生懐(こ)
を通す女は澤山ありますが、二十や三十で
妻(つま)に死なれて一生を獨身(どくしん)で暮す男は萬人に一人
もありますまい。妻に死なれた時は本當に悲
しさに堪(た)えません、そして自分の年齢(とし)が切取
られでもしたもののやうに悲しんで見せます。
甚なしいのは亡くなった奥様の傳記を書いた
り、記念碑(きねんひ)を執行したりなさるお方があるで

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60

ガラス使用

せう。だつて墓標をお寺に限つて甚の書物がマダ活字のインクが乾かないうちに、最も芽二の侵補方を心の中で捜してらつしやるんだロ。山

山夫れは酷い、まさか墓標な事は……山覚悟や也は浙と口を利らん。

山いゝえ、酷くはありません。私の知つて居る高アい実却家の方で、急に亀様の亡くなられた時、金で亀様を神様か天の使ものやうに覚めた記念事業をなすつたお方なの、だサ

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

どの、年も経たない うちに、もう新しい
第二号が出来てみました。夫から呼ぶ名
高いお寺で、もう五十の坂をすつと越えたお
寺が、鬼様に亡くなられた時、去年り同じや
うにのかたみ菓子」とかいふ記念出版をなす
て、二人は永遠に夫婦なと
書きになつたが、此のお寺も年歳経たないう
ちに、ちやアんと後補者を見付けて結婚なす
つたのよ。誰かに「飯まりではないか」って
詰なじると「今の事を亡くなつた光寿なと思つて

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

学すよんな、私から名前も先の夢と同じ名前に改名した。』って仰しやつてさうです。私、こんな事を聞くと暗が立つの、男って何という不純なものでせう。私、大嫌い、石塚さん！』と時々はぴったりと覚也は指摘して、何なたも出来るだけ、永く一度も聞いた事が無かつた。月を浴びた二人の美しい童貞を捨てなければいけ。ネ、石塚さん、』覚也はこれまで女のにから斬んな話を唯の

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

の長い影が青い麦の畑に映つて動らいてゐるのを見た時、お仙話（おぎんばなし）のお婆様な國での女人（にょにん）の精心（せいしん）とでも話してゐるのでは無いかと思つた。

「しかし時（とき）さん、今晩（こんばん）の御二人が、新しい戀（こい）を感じて結婚なすつたのなら夫れで宜（い）いが、あなたなぞ戀愛（れんあい）を此神聖なものと思つてゐますか。」

「戀愛（れんあい）？　夫りやア美しいものですわ。だけど童貞（どうてい）を捨てた男の方（かた）は最（も）う戀愛なんて有りませんわ、性慾（せいよく）なんですもの皆（みな）な……」

「夫れは横断（どんれん）です。」

「いゝえ、横断ぢやア無くつてよ。童堂（どうてい）を捨てゝ置くものは、最（も）う統（すべ）て性慾に生きてるんですの。泌尿（ひにょう）を言つても笑つても皆な性（せい）慾（よく）を連想して一から十まで性慾の事（こと）ばつかり心に止（と）めてゐるのですの。そして其の性慾を抑（おさ）つ抑れないで直ぐ神様のやうに思つた先の男性を忘れて了つて、新しい異性（ことせい）と追廻すのよ。其時になつて昔の市の言（いえ）分（ぶん）が憎（にく）らしいの。宋（そう）迚（とて）も泥棒ならないと、か、殺されたる彼が可哀（あわれ）

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60

ガラス使用

さう
想なとか……皆な嘘ですわネ。家庭を治め
るのなら、確乎した許嫁の
は宮いちやありませんか、子供が可哀想なら
家庭教師でも看護婦でも宜しいぢやありませ
んか。性慾の捌け口を捜えられないで、他んな
事を言つて再婚なさるんですもの。」
「夫れは飽まり残酷な評ですわ。」
「残酷でも何でもありません、事実です
もの、ネエ、石塚さん、私アそれから竜宮が恋しい
けれど、心は処女よ。ですから一度良人を持つた

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

の。宝は石塚さん、私ア吹ゃ
詰してみたのよ。妻吉が本当
言だって事は薄と解るんは
も、石塚さん！ムと時ぉは
ツと覚也を睨す辺もやう
、妻吉、今先い所に立つて
のえツ、何ぴす？先い
の妻吉は今晩帝仙寺で即
やありませんか。夫れに私
て申したのつ、つい浴々と
おれ歸いてらいし

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60

ガラス使用

たのネ。」

覚也は心の中で「失敗(しま)った！」と思ったが

同時に時子の意地悪い仕打(しうち)を怨(うら)めしく

態(わざ)と冷淡(おちつき)拂った風をして、「そうでしたかしら。」

かし僧が講義をしなくっても他(ほか)に今一人(ひとり)話す

予があるんですから……」

「さ～？　なって所約束なすったのですか

ら行ってお上げなさいよ。」

「何しろ晩餐(ばんさん)時雑誌まで両一銭(くらや)を参りませう。」

と覚也はテレ隠(かく)しにさうさゝやきましたが、

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

どうしたものかこの意地悪い時分に對して、
坐とも坐とも懐しみの情が湧かなかつた。

石塚さん、あの曲り角の所に俥屋がありますの、私、行つて呼んで来てますから、待つてらつしやいよ。

時よは一散に駆けて行つた。覚也は四辺の所で待つて居たが、二三分すると時子は車夫と一緒に戻つて来て、

マダ八時二十分前よ、誰も来ないから、つまらないやい。大れか前に一すでも乗をしてらつしやい。

らえ、何処か濟みたなつた格好でおの宅へお話しにつらつしやい。おもしろい晩飯樓から十好酒は飛りますから。」

覚也は「有難う」と言ひざま俥に乗つて

の馬鹿！　俺は餘程どうかしてゐる。」とひの裡で呟きつゝ拳を固めて力一杯二つ三つ脇を叩いた。憐れな悔しい氣持が湧み上げて来た。帽子を脱いで腕の毛を掻きむしつたり

掴んで引張つたりした。其中に俥は勢よく廿

今はかり走つて寺仙寺の表へ梶棒を下した。

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60

ガラス使用

二行ア井

見ると本堂には洋燈(ランプ)が点(とも)ってゐて、
上り段の所に二三十足の下駄が並んでゐた。
覚(さめ)せは皆く氣(き)運(むく)れがしてモ(ゑんが)ゝ
思ひ切つて縁側へ上つて行つた。

「石塚(いしづか)さん、此頃(このごろ)ちつともお見えになりませんねえ。」

「ツイ社(しや)の方が忙しいもんですから……御無沙汰ばかりしてゐます。」

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

142

「私、今日から独逸語(どいつご)を教(おそ)はりに来たのよ。あなたを驚かさうと思つて一生懸命ビヤーマレースを読んで見たけれど、矢張り独習は駄目ね。」

時子(ときこ)は紫縮緬の包(つゝみ)から エンゲリン読本を取り出した。

「ルーサアの話が書いてあつてよ、ルータアての、ルーテルてのですつて。」

「ルッタア《LUTTER》だそうです……では読んで見ますわね。」

覚也は私を暫中に持出して待合せになつた。

時子は何かしさうに話をして紅くして読本に眼を落した。覚也は近視なので話と書物へ近寄せると異性の香が突嗟にした。

四では、私、読んで見ますわ。」覚也が一通り読んで譯をつけた時、時子は微笑みながら読本を一二寸自分の方へ引寄せて、すら〳〵と読んで直ぐ淀みなく譯した。

「其の調子で一年もおやりになれば僅なんでは直ぐ取残されて了ひますよ。」

「だって私、忍耐が無いすよ。」

「興味が出て来ますと止せと言っても止されますまい。あなたの先氣象では……。」

「然うなんぱ宣うですが……。」時々は読本を念んで端然と坐った膝の上に両手を置いた。

「先夜は失禮しましたわね。私、度々あの時の事を想い出しますのよ。とうして組んだ蓮葉な事を申上げたらと思ってね。」

時子な耳朶を紅くして俯向いたまゝ羽織の紐を弄っていた。

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

私共の社会(しゃかい)の親(おや)というものは

14代

の僕は大変な刻苦(こっく)を厭いました。何しろ学校と教会とより外の空気を(とんと)知らないんですから、四角な小い窓から見た私(わたし)の親(観)ですからね。私は独の晩全(すっかり)別世界へ投出されたやうな、急に大人(おとな)になつたやうな気持が致しました。凸

「然(さ)う？　私、何ともお返事の仕様が御座いませんわ。そんなに仰しやられては、……凸」

「夫れから時子(ときこ)さん……凸　覚(おぼ)えていて？　凸　僕は急に御伯(おじ)

「いて、「僕は此境如何(いか)にもかなくなりました。」凸

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

「然（さ）う？　どうしてですの？」

「今まで此幸福（しあわせ）に強く感じた事でも、近頃は何の刺激（しげき）もなくなりましたの。どうしてでせう？」

「もつと〳〵大きい刺激（しげき）を要求してみなさるのぢやアないつて？」

「大きい刺激とは？」

「焼（や）き盡すやうな、火のやうな愛の手に擁（いだ）かれて見たくは無い？」

「覺束（おぼつか）なくも（ぼんやり）幻の（ような）岩（いわ）を見詰（みつめ）てゐる時（とき）の如（ごと）くに？」

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

た。

「石堀さん、最一度言はして頂戴な。私は処女ですよ。ですから貴方の童貞を棄てるのですよ。ふたりの外に神聖な恋もあり得ませんわ。私は貴方という子童貞の……」

「貴女の童貞の所有者を考しるやうな赦情で考して来るに考して見たいのです。私はこれまで祀んな人に打つかりました。しかし

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

大抵の男は駄目(だめ)です。私の望む童貞(どうてい)を持つてゐるのは石塚(いしづか)さん、あなた一人(ひとり)よ。ですのう、ネ、石塚さん、さうした意味(りみ)で私の意を許してくださいナ。枯弥的(こやてき)にネ、私は本当に純粋(じゅんすい)な枯神で、本当の恋をしてみたいのよ。』

覚也(かくや)の胸の中では熱火の焔(ほのほ)をも消えるうを感じた。

そして眼(とき)が暗(くら)むやうになつて来た。

『時子(ときこ)さん！』と覚也(かくや)は机を押退(おしの)けて夢中になつて両手を前(この方)に伸ばさうとした。

『あなた！誤解(ごかい)なすつちやいけません！』

時子は姫君様を自に障る陸に寄つて、覚也が一すでも早く縁側へ運び出しさうにした。

「時子さん！」覚也は机の上に身体を投げかけて、「昔う僕はお目に掛りません、あなたと交際してみては済てゐます。」

時子は机の傍へ戻つて来て、「名塚さん、何卒お目に掛りませんでした。」

「いゝえ、お帰り下さい。」

「どうぞ御帰り下さい。」

二行目

覚(さめ)の
覚(さめ)せは竟に寐を得上げなかつた。
覚(さめ)かくや
覚せは甚晩まんじりと眠れなかつた。
の寐は生(せいらい)来初めての混乱(こんらん)に遇遅(さうぐう)したのであつ
た。聖日(せいじつ)礼拝に行つても
も手に付かなかつた。
清(しみづ)水君、僕はどうも頭痛(づつう)がして仕様がな
いから、君に此後(こんご)を頼んで置くよ。一(いち)の
面は此の投書と此の切抜で理由られるやうに

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

なつてみるから、二ノ面はいゝ材料が揃
つてますから……」
覚せは眉根に皺を寄せ乍ら拳で頭を軽く二
つ三つ打いた。
「ところで、御帰りなさいと言つて置きます。御顔色が大変悪らですから、
寝りお休みなさい。」「洋れは視切に言つた。
「では軽みますよ。」「覚せが斜め北を出て下
宿へ帰つたのは一時過ぎだつた。
和服に着換えてゴロリと寝そべつた上ん寝そべだ

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

15-2

ましづ 瀬半と天井を見詰めて先ず板を勘定して
みた。夫から夫が二間の通しであるか、
一間板の継合せであるかを験した。そして木理
の細かいのと荒いのとを比較して見た。
両手の指を廻合して夫れた頭を載せて天井
板の木理を見詰めて居ると
うにも見え、渦のやうにも見え渦のやうにも
見えた。眠と眼を閉ぢてみると天井一面が渦巻
のやうに思はれて、何時の間にか自分の身体
が其の渦の中に捲込まれてるやうにも感じら

天井

れた。

「はあーい！」と叫ぶやうに喚つて撥起き（はねおき）た時、トン〳〵と跫音が上つて来る足音がして、「今日は！」と声を掛けつゝスルリと障子を開けたのは時子（ときこ）であつた。

「御免下さい、少し早過ぎましたわね。さアどうぞ御着換（おきかへ）下さいまし。」

時子（ときこ）に出（さ）つて言はれて気付いて見ると、覚也（かくや）は寝巻（ねまき）の紐を結んだまゝ（かゝり）で、覚也（かくや）は狼狽（うろた）へながら押入の中から縮緬の兵児（へこ）

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

帯を出して夫れを手早く結んで机の前に坐つた。時子は神妙な記をして風呂敷包から筆を出した。既う昨日の事は忘れたかのやうに平然と取澄して火鉢の横へ端然と坐つた。堂や夫と思つたのか落ちも不意やせは机に対つたまゝ暫く黙つてゐた。

切今日は下読して来ましたから三章ばかり進めて戴きますわ。」

時子は昨の上へ本を載せて声で読んで居た。

「では、次を読みませう。」と竟也は震つる声を叱押へ絞らしつゝ、一章読んな。

「お祖母さんをお祖母さんとしませう。」

修氏一章読んで譯をした。

「もう一章お祖母さんしませう。」

読んで三章目を読んだ。すると時子はもうお直しなさいましよ、發音が悪いから恰かしいよ。」と読んで直ぐ立派に譯をつけて、「有難うございます、明日は朝疾く伺ひしてよ。」

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

覚(おぼ)えず涙を失って返事が出来なかった。時(とき)
さるは早速書物を(台)(そっけ)なくの左様ならと
挨拶した。
又(また)た様ならと言(い)ったっ覚(おぼ)えは始めて我
に帰(かえ)ったやうな心持で時(とき)子(こ)を見上げた。今(け)ふ
の時子(ときこ)は昨日(きのふ)のやうにケバ〳〵しい装(つくり)で無く
、年掛(としかっ)た地味(じみ)な袴に白地(しろじ)の二重(ふたえ)の紅(べに)裏の無
い帯をキチンと結んだ嫌味(いやみ)のない姿(こしら)へが却っ
て手堅(てがた)よりは二つも三つも若く見えた。
時子(ときこ)はお嬢(こぞう)と座(ざ)を開(し)めて挿(さし)絵(え)の障子(しょうじ)を閉めて子

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

俥のやうにパタ〳〵と階子を降りて行つた。

覚也はワク〳〵と踊る胸を抱えながら、障子の陰へ行つて廂の蔭から暗がりの姿が体を現はすのを待つてゐた。誰かゞ寝てゐると見えて、其所此所に小い水溜りが出来てゐるのを、時子は注意深く避けつゝ指して後先隣りの障子から覗いて見たが、最う時子の姿は其所に見えなかつた。

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

其中に風呂が沸いたと知らせて来たので、
風呂場へ行った。木蘭風呂に浸り乍ら思った。
この時の詮方が餘り旨過ぎる。何所かで変
だと先夫は医者で来国
の ドクトンだったとしよが、事によると獨逸
に居たのかも知れない。すると待ては其の夫
に獨逸語を教はってゐて、
ら此の俺を訪来してゐる
。若し然うだとすれば彼の女
つまるのならこの

1579

は甘つて来る。甘つた葉がスルリと抜ける。
強くなつてみれば艶めく、弱くなれば毒向かう勿訓と来る。嫁(よめ)入(い)俺は数乗れされて居る内が！」
貴也は風呂から上ると直ぐ手紙を書いた。
「新婚改良の考、皆らくの間多たには往復(おうふく)の暫古はち休み下され候、稀(まれ)々考つる所も有之(これあり)共何れ共中に日にか

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

書終つて見(かえ)せは〳〵種々(いろ〳〵)考つる所も有之(これある)と
いふ所へ置手(おきて)紙をおつた。夫(それ)より未(いま)なくなつて
た時(とき)よが夫れきり、ふつつりと
は矢張(やはり)淋しく感じるだらう〳〵と思(おも)つて
あつた。
　　(倡一芸)
　　(乾(かん)児子(こども)を)
　　(未練なり)
　　(時(とき)よの)
　　(そく持(もち)せた猶(なお)、時(とき)
子から拘(おわ)れた〳〵怨みつらみの長い手紙が来
るか、たも要(い)しば本人が押掛けて来て、縋(すが)り
ついて泣倒(なきたお)れるか何(いず)れかであらうと思つて
夫れとなく待設(まちもう)けてゐたが、世(よ)も経(た)つても一

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

1200 | 64
1200 | 5-
161 | 68
12 | 2.3
25-0
18+
46

二枚四行

寄 161

と云ふに帰つて来たらしく

時子は立つて女中は二階へ上つて来なかつた。

「覚せは梯子から桐平の所から下を覗くと女中は縁側とせつせと拭いてゐた。

「おい、姉さん、手紙の返事は無かつたかい？」と訊くと、「ええ、ありませんでした。」と別もなく言つた。女中は一寸二階の方を振仰いで「如何かしようたします」と坐敷へ戻つたが、甚だ心ともない容子であつた。

無論翌朝も時子は見えなかつた。

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60

ガラス使用

濱 183

宿命

山

宿命 (四)

通計二百二十九枚

七十三枚

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60

ガラス使用

山窩

「もしもし手洗の酒へお出るんかノシ、夫りやア此の廣い道を眞直ぐに行きなはれ、直ぐ其の下が酒ガやはノシ。」

二つの籠に小石を容れたのを擔いだ女は斯う言ひながら碌に音無の瀧を見向きもせずに石ころの多い坂路を「ハア、ヨイシヨ、ハア、ヨイシヨ。」と小い声で掛声しながら登つて行つた。

(東京下谷田圃)

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

165

音無は雨水の溜(あまみづ)った真中(まんなか)が、
丸(たに)のやうに掘れ凹(くぼ)んだ路を、幾度か轉(こ)ろび乍ら、
立(た)ては辷(すべ)り、辷(すべ)っては起(た)ち、靴を踏(ふ)み
しめ踏みしめつゝ一町(ちやう)ばかり降(お)りて行くと、
サアーツ！　サアーツ！
と岸を洗ふ波の音(おと)が左(ひだり)の方(かた)から聞えて来た。
日(ひ)暮(も)れ迫(せま)る其(そ)の所(ところ)なんぞ
コと小(ちひ)走(ばし)りに二三間走り降(お)りると、急に右手
がパーツと明(あか)るくなつて、道の両側から参差(ざまざま)
そゝ茂(しげ)り合つた雑木林の緑(みどり)のトンネルの向(むか)
に可成(かなり)遠い青空の芝生(しばふ)が見えた。芝生は斜(なだ)

半紙二〇（群栄坂下山田製）

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

になつて濱の砂原の所まで續いてゐた。一疋の牛が飢(う)えタンノラこれとしふやうな顏付(かほつき)で此(こ)の方(つち)を眺めてゐた。

「あゝ！」と音無(おとなし)は珠らしい物に出(で)も會(あ)つたやうに叫び乍ら芝生(しばふ)の所へ走り出て行つた。涼(すゞ)しい風が濱には生(は)えて居る雜草を搖(ゆす)り動かして居る。

なから吃上げて來たので、右の手で中折(なかを)れの帽(ま)を摑んで左の手をポケットに突込(つゝこ)んでハンケチを取出さうとしてゐる時、不圖芝生の向(むこ)ふに小い乞食小屋(こじきごや)のあるのに氣付いた。

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

音無は汗を拭きながら芝生を越えて小屋の前まで行つた。そして開放した戸の中を見ると、其所には三十七八でもあらうかと思はれる能く肥えた女が垢抜のした、しかし所々に継布の當つた單物を着て圍爐裏の中に小い鍋を吊して何かユトユトと煮て居た。

「御免下さい、宿屋は。」

と言ひ乍ら戸の中へ入つて行つた。女は山窩の時巡査の報告に屢〻出る度に繰返すやうな驚愕と恐怖とを面に現はしたら、少し

く腫(は)もやうに、ちいッと音無(おとなし)の顔を見詰(みつ)めて
居たが、靴音ん隣(おと)がされた紳女は飽々に音無(かとなし)、
の洋服には金釦(きんぼたん)が無く其の腰にはサアベルが
光つて居ないとしふ事を意識(しき)して来たらしく
、口何か御用事でいらッしゃいますなと
に頭をさげた。
口いゝや、別に用事も何も無いのですが
其処(そこ)まで散歩(さんぽ)して来た序(ついで)に一寸休ましてと戴(いただ)かう
と思(おも)ひまして……ッ
口先(ま)ア、こんな所へ、と女は軽妙(けいみょう)な顔で言(ちょ)

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

なし
声を見上げた。音声はニュ
おとなし
の上へ腰を卸したが、丁度其
おろ
が来て、家の中を不思議さ
さしのぞ
うに差覗いた。容
てんてい
のずんと売け上つた五十格好
ぬ　つかっ
二三
未程脱け左、洞穴のやう
ほらあな
けて、四能うお出でなさいま
おとなし
方か知りませんが？」と言つて不安らしい顔
はで音声をかろ〳〵と見た。両の
ほ　て
月な大きな蛇魚がぐうと起つた
なまず
やうなあつた。大れが甚の男を此事な悪人で

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

でもあるかのやうに見せた。

「宜い天氣ですナ。今日は。」と音無は快活に

如何(どう)言つて海を眺めた。

「結構(けつこう)な天氣です、我々に取つては本當に有難い日和(ひより)です。」と男は音無(おとなし)の傍へ腰を掛けながら言つた。

「あなたは最(もう)う此(こ)の所に永くお住(すま)ひですか。」と音無(おとなし)は又尋ねた。

其時音無はくるくると家の中を見廻した。壁には蓑笠(やうもり)が三枚懸けてあつた。杉皮葺の屋根に漆(うるし)を塗つたやうに眞黒く煤(すす)けた葉

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

てみた。

「もう結構(おれ)も五年になります。」

「この先も五年も辰左の下積(したづみ)に居たのですか。」

「はい、其の次前は新官の下積(したづみ)に居たのです。」

「が、御長さんが立退(たちの)けと仰しやるので……」

男は俄ん言葉を柔(やはら)げて、媚(こび)るやうな笑顔をしながら、「時に貴方(あなた)は警察のお方ぢやアムいませんか。」

「いゝえ違います。俺(ぼく)は耶蘇(やそ)教の牧師なんです。」

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

「はゝア、耶穌教の先生ですか。」男は安心したらしく妻君の方を顧みて、「ちやア、あの晩班揃の……」と言つて二人は黙頷き合つた。

「あゝ、此の間の晩までは晩班揃で説教致しましたが、これからも時々弘しますから、どうぞお出かけ下さい。」

「有難うございます。但し家先生は幸もお薬を垂掛て載いてねますので……」

「但し君を知つてゐるのかネ。」

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

知ってゐますとも、妻は絹ア見えても時々癪を起すので、甚の度びに田便さんのお薬を頂戴するのです。五年も七年も師恩に報ひ奉らなければなりませんから、何ので此恩報ひをせねばならんとは思つてゐるのですが、我々の分際です から、時偶に鰻を喰上がるやうな贅沢をお上かするのですが、夫れでも其様なものを喰上げると俺はお前達に物を貰ふ理由は無い」と仰しやつて、甚の都度何か食かを却つてお氣の毒ですからいいと

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

「本書に田丸先生は、もう……」と側から
（かたわら）
（そば）
（かみさん）
雲君が宿泊をした。音無（おとなし）は話の端緒を尋ね
（いとぐち）
書そのの北帯ん嬉しかった。
（ほっ）
「どうです、あなた市は如何うしてお暮しな
さる時、本書に愉快だと思
（ねが）
いますか。」
「さうですなア、ありますよ。」男は笑ひな
がら音無（おとなし）の市へ少し身体を捻（ねぢ）向けた。
「但那（だんな）は警察の御市かやアムいませんから
今日はアケスケにお話し致しませうか。」

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

ロお伺いしたいもんだネ。ちなみに市の生活
状態(じょうたい)を？
ロの生活状態？　そんな洒落(しゃれ)れたもんぢやア
ありませんが、私も妬(や)かつて見(み)る三
十年近くも、こんな情(なさけ)無い生活をしてゐるの
です。私は二十三の時あゝいふ
を手しながら一緒(いっしょ)に故郷(くに)を逃げたんですよ。
これは可哀(かわい)そうな家(うち)の嫁入つてゐた
ですが、私と変な縺(もつ)れ合ひになつて、突走(とっぱし)つ
たんですよ。私は去(やつ)張り此の縺(もつ)れの
もので、ロ

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

高産ですが、――――」

「然うか、嘗ては高川奥の者だよ。」音無は

「然うですか、どうでございますか。」

「寒川という所です。知ってゐますとも、私は高木村といって海に近い所ですが、寒川へは唐々鰹捕りに行きました。」

「鰹捕りに？」と言ったが、折角訊しかけた

てみた面白さうな話を傍(おきみち)の外(そら)にして了(しま)つた事を殘念に思つた。

「私(わし)は鰹(かつを)捕(と)り鮪(まぐろ)捕(と)りが仕事ですからな。」

「鰹や鮪の落(と)れない時節は如何(どう)なさるのですか。」

「其時は辻占売(つじうらうり)と、これとですよ。」と云つて右の手を上向けて二三度動かした。夫(それ)は博奕(ばくち)の骨子(さい)を轉(こ)がす真似(まね)であつた。旧若い時に骨子(さい)や骨牌(かるた)を弄(もてあそ)くる仲間と交際(つきあ)つた事のある音無(おとなし)には直(すぐ)に其の意味が解(わか)つた。

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

178

「以前は甚様な事(ぜん)も出来(でき)たらうが、今は法則が改正なつて、現行犯(げんこうはん)で無くとも罰(ばっ)られる事(こと)になつたから、博奕は一切出来(でき)なくなつたからうね。」

「旦那、夫れは歴々(れきれき)のお言の言ふ事ですよ。身に浸(し)み込んだ事は法律や規則で到底(とても)止(や)められるものぢやありません。殊に素人賭博(しろうとばくち)と来ては「色」よりも三倍濃いといふんですもの。私も妻(さい)も性来ユレが好きなんで「骨(手)を折(せっ)かす事位をしながら「二人は手に垂(手)を取

拳銃二〇（鈴柴茂下山田鍵）

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

とつとり

つて国を出て西に東に所々を
ましたが、妻は何所へ行つても
取りになつたものです。所が旦那、面白い事
がありましたよ。男は左も追憶の快楽を味ひ
たいといふやうな顔付をしながら、可笑な
事があつたのです。夫れは十度目の冬でした。
出て八年目の冬でした。夫れが故郷を
で土地の金持衆と檜蒲一を
矢張り妻の頭取で……所が
て来たものか、旦那衆が張つても張つても

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60

ガラス使用

1 7890

な妻に奪られて了ふんです。私は妻の側で全の婚姻をしてみたんですが、どうしても八九百両は勝つたと思つたんですナ。甚吉の八九百両と言やア大したもんですよ。栄が一石五両でしたから。甚吉で私は相談しましたナ。『此れは餘り不思議かや、誰かに一つ頼んで代つて貰はう。』と言ひますと、大金持の主人が妻に代つて駈ねばなつたのです。私と妻とは一両二両ヅヽ殖つては奪られ奪られして博奕の止め時

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

だと思いましたナ。そこで私は態と朝まで坐つて居るやうな風にして、襖を脱ぎました……夫りやア旦那様うやつて沈着を見せたんです。夫から私は其の襖の両端を確と結び合して其中へ、宵から書が晴掛りたお金を少しづゝ紙と宿札まして……。私は婆場へ思ひ切つて六七十両のお金を放ちこうかして置いて、一少し暗い合が悪い、此金を取むに一と書に言付けて置いて忘と其の襖を抱えて、たまらん、と叫んで番陰へ行くやうに見せかけて裏へ出て

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

来たのです。そして酌(しゃく)をしながら、《おういい、元気な杖(つえ)、ちょいと来て呉(く)れ、早く〳〵》と呼んでいます。すると妻(さい)は三十両のお金を茅場町に置いて帰り支度をして孫側(そばえんかわ)に坐って居(い)る先生の前へ出て来たのです。そして「おまえは妻(さい)と共に直ぐ脱(ぬ)けましてお逃げなさい。孝子越(こうしこえ)をどうぞ」と言いました。先生は驚いて「それでは貴女(あなた)が危険(あぶな)いではないか」と言いましたが、妻は「私は女(おんな)だから大丈夫です。早く逃げて下さい」と言いました。先生は仕方なく(やむをえず)、泣く泣く(なくなく)妻に別れて、逃げ出して(にげだして)、木ノ本の八幡(はちまん)まで逃げて来ますと、後(あと)から追手(おって)にも追つかれず故郷へ帰ったのでした。八年振りで帰ってみると

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

183

年老つたおの両親は食事もやがてはずで靴も脱ぎ掛けしてゐました。そこへ私が七百三十何両とゝ金を持つて帰つたので、先ア元気づきましたが、妻の先の行為を言つて来るのです。所が夫れから二人で旅へ出て行つたのです。七十両の金も一度に壊へ散財する事無しで、とう〳〵困窮してゐるのです。

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

甚間ん監獄へも三度行って来ました。妻も三人亡なゐは皆々死なしてゐる。私も少々無茶な心を起しまして十。男は動く俯向いて居たが口陸分面白い事もありましたよ。」と云つて冷たく笑つた。

「無茶な心とは？」音無は詰の繃帯を頼み

やうな眼付で男の方を見ながら問うた。

「旦那は饒舌のお方かや無いから申します

が、私ア辻占を売る時人間の心といふものを能く見抜くんです。マア此の熊野の海辺で

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

1855

は亜米利加へ出稼ぎしてる人の家へ目處を付けて行くんです。大抵マア一枚は買ひます。其時運勢の悪いのを一枚買るのです。すると今一枚！と来ますナ。今度は中等の所を一枚買るのです。十人で五六人までは其の中等が極悪いのに変るか極善エのに化るかと思って三枚目を買ひます。其時悪い運勢のを寄付けると、最う夫れッきりで買いません。お金を溜めるとか出世するとかいふ奴を當ふと、どうも人ものは可笑しいもの

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

で甚様な事は信用出来ん
と四枚も五枚も買ふんですよ。
四ふん、夫れは妙な理由でせう。
四夫りやア旦那、人間てものは不幸が當り前で運の善エのは千人に一人ですもの、但分の息子や亭主が甚様な病気に富豪に當らうとは思はんのですナ。だから疑が起るんです。其所を見込んで安心させてみたり、心配させて見たり耗んな奴を殺るんです。もう甚様私らのやうな人間でも全で神様か佛様のやうで、甚の

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

187

人の心は悉皆自由自在に出来ますよ。若し私に先生達のやうな学問があったら日本中の人を自由自在にして見せますがすよ。人間の心でも墓石のやうなものですよ。はいいは心。男は得意らしく語って腰の煙草入れを静かに筵の上に置いた。

「ふん、然うですかなア。」吾妻は全く感心して了ったやうな態度で「二三日勘弁いた。

「旦那のやうに立派なお方が私の気分を慰めへお歩で下さるのは不思議な事ですから、夫れ

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

は高宮栖が違ふから不思議なんで、こゝが博
ち
妻となると面白いもんですナ、又た一種特別
で気食ふ風も墓場もありません。私が所言
の磧に座る時、毎晩〳〵櫛笥一を妻にやう
たのです。其時旦那、母のお
人も〳〵ましたナ。可笑しいもんです、平
生は妻やお達は基のお家の内迄ついても来れ
ないんです。私達が坐敷へ一足も上う
ものなら、気食如か！と大目玉でせう。
所が博奕となると私の汚い力尾へお出か

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

けですからナ。おすけさん（おすけ）櫻満一（さくらみついち）をやる時は皆（みな）
な妻（つま）に自由自在にせられてるんですもの、全（まる）で金持（かねもち）は妻（つま）の家来（けらい）か足拭（あしふき）ですナ女将（おかみ）は。ㇾ
男が洞（ほら）のやうなロを開けて笑つた時妾（わたし）さん
はロそんな事を、あんた、ーーーと言つた。
るやうに言つた。
ロなアンの、ロ東さんの中友達ですもの、
蒲団（ふとん）もんですか、のろ助（すけ）耶。ㇾ男は音曲（おんきょく）の稽古（けいこ）を
見（み）さしやうにした。
ロ大丈夫です、アケスケに話して下さい。ㇾ

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

「失礼な話ぢやが、旦那市のお宅旨でも私らのやる博奕（ばくち）のやうに此の人間の魂を有頂天にさせこれるものだつたら、猫んな大きな立派なお堂（おどう）を建てゐでも、ちつとも驚きに来る筈ですナ。」

「さうだ！」と善吾は自分ながらおどなしい声で言つた。「殿（みや）を殿ちて三日に建つるものよ。」としみ言葉があるのです。大きな立派なお堂でなくつても、三日で滅亡する寺院の中で充分なんだ！」

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

其の言葉の意味は男に解らず笑はなかつた。
おとなし
言葉も鮮り獨合点の言葉を少々私ざた。
旦那、も一つ面白い事がありましたよ。
私が此の川筋へ辻占を賣りに行た時、一日中
賣歩いても誰一人者賣つてくれる者がなくつて
私も弱りましたよ。すると山の上の一軒屋に
博奕があるとゝか事を子供の声話で知りまし
てネ。早速其所へ駈付けたのでせう。する案
と旦那！大變でせう。旦那衆がさう札から
銀笼からゝゝゝどうしても一人前百圓以上も積

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

んで、ぐるりと二十人近く環になつて居るん
でせう。私は縁側から
見て居たんですよ。実は私の心はムツ〳〵し
て居たのです。けえども風体は汚し、お金は
二三十銭しか無し手の出しやうが無いのです
。褞袍の中へ七百何十両と少々金を捻り込ん
で山を越えた時の事が私の眼の前にちらつい
て居んです。すると其中の旦那の一人が黙つて
縁側へ五十銭銀貨を一つコロリと投げ出
して『おい！　夫れを持つて行け！』つて云

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

辻占売がって
を拾り人一人
の魂はもって
るんですもの、
立十銭銀貨を
おけつけられ
ち、気持の善
もの名ですり
ませんよ。

13

ふんでせう。」私は一寸癪に触ったので黙って
知らん顔をしてゐました。すると又た五十銭
銀貨を一枚、別の旦那が投げて呉れました。
けえども私はまだ黙ってゐました。私が五十
銭銀貨二枚を受取らないもんですから皆は
驚いたやうに私を見て居ました。そして何が
かヒソ〳〵話をしてゐたが、三十恰好の一寸
宮相撲でも取りさうな男が出て来て、甚の銀
貨二枚を私の袂へ入れ仕事をんです。私は一
二尺恰退りして、ふいと其男の顔を見上げた

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

時、「よう！」と服の前に何かがぬんで来たと思ふと私の頭はがアーンと鳴りました。私は其所へ打ち倒れました。「ニヒヒヒ」とりや此の乞食奴！芝様は姿は焼場荒しかやなど、テラ取りがやな「さう言つて殴られないのつて、先ア石のやうな拳骨で四五十は打たれました。「手向つば殺さるる。其時私は思ひました。かけ出さうや、とこまでも向ふ迄せにして置かうさう眼を決めて一言もいはないで居ると、サア向ふは益気味が悪くなつたと見え、私を

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

引起しました。所が私が胴の上がスッカリ腫れて了って、日益が悶かんのでせう。夫れでも私は黙ってゐました。

すると私を立派な宿屋へ伴れて行って、至極と慇懃やら旦那衆が平謝りに来るやら大騒ぎなです。私は氏も素性も言はず旦那衆に一言も言はずに、其宿でお酒の飲放題、御馳走の食べ放題で二十日も逗留して、スッカリ腫も引き擦痛も癒って了ってから引揚げて来ましたが、宿を立ちに其所の主人が草

先方も気味悪くなったと見え、

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60　　ガラス使用

鮮人（せん）の鞋（くつ）屋（や）とし、男（おとこ）にて、旦那（だんな）！
宜（よろ）しくましたよ。私（わたし）ア今（いま）此（この）金（かね）は貯（ため）金（きん）して居（い）ますがネ。」
音無（おとなし）は貯金という言葉（ことば）に驚（おどろ）かされた。少（すこ）し狐（きつね）につままれたような感（かん）じで、「何（なに）を食（た）べるよりも貯金（ちょきん）をする方（ほう）が有（あ）りますか。」と聞（き）いた。
（鈴木）
「有（あ）りますとも、気（き）違（ちが）いの様（よう）に働（はたら）いて貯（た）めますサ。旦那（だんな）、貯金（ちょきん）は慎（つつし）みなさいの、商売（しょうばい）に上手（じょうず）な奴（やつ）は貯（た）めますサ。旦那（だんな）、さぁ行（い）きやアそ

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

食に夫婦なんてあるもんですか。旦那達が見てらっしゃるような可哀想なもんなら、一日だって連水添う馬鹿な女があるもんですか。

牽公なり旦那捨てなり出ます。お姉さんは托鉢という上品ですし、傍厄さんは名の通った美の百瀬という人様から一目も二目も置かれる美人ですが、皆な同じ事です。私の縄張りへ能く来る勢州という男なぞは三百両位はいつも懐に忘れてますよ。此間も面白い事があった人ですよ。其の勢州が独の洞穴で片手の方

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

の絶壁を指さし乍ら「一寸二朱つゝ賭けて肯牌を乗つてみたんです。其所へ刑事駐在さんがやつて来ましてネ。直ぐ三人は現行犯で引揚げられました。一体博奕ものは全財産を無くしたり若旦那が家のお金を盗み出すてんで罰金か監獄かのどちらかですネ。だのに今食が洞の中で何の用事も無いとたつて、夫が女の中に居たつて、夫が若い駐在さんは正やりませんか、けがでも直に今食三人を引揚げましたよ。失礼しかし

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

乞食も一つの商売と思やア、
しやうに行(しば)られて行くのもつ
ら抔と思ふ時はなかゝ、
己と男は自分の話に論理の矛盾(むじゅん)
のやうに、同ねエ、私(あたし)ン許へ
遊かお出でたんだやさ、か、
ものか悪いのですなア。」と怪(ふや)しう
同夫から其の勢州は如何(どう)
同乞食と監獄に打ち込んで
を川へ追込もやうなもんですから、四討金三十
19 宛(ずつ)言渡(いゝわた)しましたよ。
己。

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用